

いのちの底に 松井恵光

一、凡夫にかえる

よく「どうせ私は凡夫だから」という言葉をききます。凡夫なのだからこのような失敗をするのは当然だと、自己弁護の意味で「凡夫」という言葉を、いとも簡単につかっています。その場合の凡夫は「つまらぬ人間」という程の意味であるのです。

親鸞聖人が凡夫といわれるのは、二十年の修行の結果、よき人法然上人の本願念仏の教えを通して、見出された「罪悪生死の凡夫」「煩惱具足の凡夫」であつたのです。丁度、娑婆という言葉が浄土にふれていわれるごとく、仏にふれて、仏に遇うことによつていわれた自覚の言葉であります。

凡夫のままではすぐわれないといつて、凡夫でないものになろうとする。少しでもよくなろう、少しでも偉くなろう、少しでも信者になろう、有難い人になろうとします。しかし、それは益々仏から離れていつていることになるのです。なれはしないのです。それをなれるように思っているのが、根の深い自力―はからい―の心なのです。

実は凡夫になるのです。凡夫が凡夫にかえるのです。罪悪生死の凡夫ですから、生涯、どんなことに出会い、どんな目にあうかわかりませんが「業報にさしまかせて」うけとつていくのです。そこに凡夫に安んじていける道が開かれてきます。

テレビで「スター物真似歌合戦」というのがあります。流行歌手が、他の歌手の真似をします。どれ程うまく真似ているようであっても、続きません。努力はしているのですが、すぐに自分の地声が出て、息切れがするのです。それにひきかえ自分の歌なら楽々として歌っています。

古いことですが、日露戦争のとき、沖楨介という人がスパイになつて満州の地に潜入し、ロシヤの状況を内地に知らせていました。満州人と同じ服装をし言語、習慣に至るまで一分のちがいがあつても、この役はつとまりません。しかし、ある日突然につかまつて、すぐに銃殺されました。それは朝、顔を洗うときです。水の少ない満州の地では、両手にすくつた僅かな水に顔を廻して洗います。日本人は顔はそのままにして、両手にすくつた水で洗います。いつも細心の注意をして、その土地の習慣どおりにしていたのですが或る朝、うかつと両手にすくつた水で顔を洗いました。身にしみこんだ日本人であることの風習がでたのでした。かねてからあやしいと目をつけられていたものですから、すぐに日本人であることが見破られ、銃殺されたということでした。

自分が自分でないものになろうとして、どれ程努力しても、何かのはずみについて本当の自分が出てしまいます。凡夫が凡夫でないものになろうとする、それは常に緊張の連続であり、又常に構えていなければなりません。「三恒河沙の諸仏の、出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせども、自力かなわで流転せり」(p502)とあります。まさに自力かなわで、流転をくりかえしていかなねばならないのです。

いま、南無阿弥陀仏は自己発見の法であると、金子先生はいわれました。煩惱具足、罪悪生死の凡夫としての自己を発見させてくれるのであります。従つて南無阿弥陀仏に遇つたということは、凡夫としての自己に遇つたということとあります。自己が自覚されたということは、お念仏にあつたということとです。ところが、お念仏に遇つていても、凡夫であることを忘れてしまいます。凡夫の身から心が離れるのです。

聖人のお言葉にいかに「身」という言葉の多いことか。「自身は是れ 現に罪悪生死の凡夫」(p640)「愚身の信心」(p627)「行者の身」(p500・p503)「そくづくの業をもちける身」(p640)等々。誰がなんといつても、思ひはなんと思つても、凡夫がわたしの身の事実であつたのです。それを心(はからい)が身からはなれようとしします。ところが念仏のところ凡夫にかえられるのです。念仏を忘れると、又、心が身からはなれて、ああなつて、こうなつてと、なれぬ

ことを知らずに、なれることのように思いはかるのです。

凡夫が凡夫でないものになろうとする、それが念仏によつて凡夫に引き戻されていく。その念仏を忘れるとき、又しても凡夫であることを忘れる。このようなことを繰り返していくのですが、しかし再び迷うことはない、聖人は力強く教えて下されたのであります。

二、出離の縁あることなし

出離の縁あることなし、とは『歎異抄』後序に出ている言葉で、善導大師のお言葉を引用してのべられたものです。いうまでもなく出離とは生死出離ということで、迷いの世界を離れ出るということですが、その縁がないのですから、すぐわれる手がかりはどこにもないということです。きびしくきびしく自己を教法に照らされ、見つめたところからでてくる自覚の言葉で、他のところでは「地獄は一定すみかぞかし」とも、聖人はのべていられます。

自身は是れ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈し、常に流転してきたわたしなのであります。やってきたことはすべて雑毒の善であり、虚仮の行であり、惡業を以て自らを莊嚴してきたわたしなのであります。ここまで深くわが身にあつたところからでてくる言葉は、出離の縁あることなき身であることは当然のことであります。なにかなるなどと思うのは、全く自惚れであつて、なんともなど絶対にならないのです。

よく世間では「今になんとかなる」とか「そのうちによくなる」とか、そのような言葉で自らも慰め、人もなぐさめているのですが、よくなるはずなどなく、所詮はなんともならないのです。しかし、出離の縁あることなし、というこの言葉は、人間から出る言葉ではなくて、如来の大悲から出た言葉、如来のことばなのです。なんともならない、とそのままでおわるのではなく、なんともならんままでよかつたと、如来のはからいに身をゆだねた大安心の境地なのであります。

久しく御縁のあつた興正寺派末寺の住職が四十九歳でなくなりました。人の世話をよくし、底抜けに明るく、多くの人に好かれていたこの人は、こよなく酒を愛した人でもありました。最初は悪性の風邪かとも思っていました、年が改まつてもよくならず、春になるほど悪くなつて、衰弱はげしく、医師は肺癌と診断をしました。近くの仲良かつた住職が見舞に行つたとき、げっそり面貌の変つたこの人は「えらいツケがきよつた、ナンマンダブツ」と、ポツリといました。

わたしはその言葉を聞いたとき、愚かにも意味をとりちがえたのです。酒の好きだつたこの人に、あの店この店からツケがきたのだ、病氣になつたときいて、支払ってもらえなかつたら大変と、請求書をもつてきたのだと思つたのです。ツケは払わねばなりません。にげもかくれもできません。

ツケという言葉で表現したのは、業報ということであつたのです。いまにして思えば、不治の病とさつたその人が業報として、受けとつていこうという覚悟が「えらいツケがきよつた」という言葉になつて出てきたのであります。お酒の好きなこの人の心にくい最期のことばでありました。

やがてくるツケはどんなツケか。躍り上がつて喜べるようなツケのくる筈はありません。それを聖人は「出離の縁あることなし」と、うけとつておられたのです。どれ程、嫌であつても、おそろしくとも、どうにもならないのです。なんとななるだろう、そのうちによくなるだろうなどということは、何と思ひ上がりであつたことかと思ひおれませんか。

福井の竹部勝之進さんの詩に

明ケテモ

暮レテモ

罪バカリツクツテイル

コノ極重ノ惡人ヲ

真ノ仏弟子ト名ヅケテクダサルトハ

アリガタクテナミダコボレル

アリガタクテナミダコボレル

あけてもくれても罪ばかりつくってきた極悪人、まさしく出離の縁のないものを、如来は真の仏弟子よと呼んで下さるのであります。出離の縁のないものこそ、如来が縁をかけて下さるのであります。自分で何とかなると、自分を過信しているものに、如来は縁をかけようとしても、かけることはできないのです。地獄におちたそこが大悲の手の中であつたのです。

真の仏弟子と呼ばれば呼ばれる程、頭の下がる私でしかなかったのです。いや、頭が上がりません。しかし、そこまでの如来の信頼に勿体ないことと「アリガクテナミダコボレル」と、うたわずにおられなかったのでありしう。

二、心得開明・心塞意閉

地獄・極楽ということが問題になるときは、必ずといってよいぐらいに、あるのかないのかということがいわれます。それはどこその場所といった人間的なとらえ方なのですが、私の思っているようなあり方でないということを、まず知らねばなりません。もつとも、真宗では極楽というよりは、浄土という言葉をつかつています。私はかねてより「道」の問題であると理解しています。道とは道中、道ゆき、歩み、そこから生活ということであらわし、私はどちらに向かつて歩んでいるのか、地獄に向かつての歩みなのか、浄土へ向かつての生活なのかということでもあります。親鸞聖人ほど「道」を重く見られた方はありません。生死出ずべき道、往生極楽の道、無碍の一道、二河白道、難行道、易行道等と、すべて道でとらえられています。往生ということも浄土へのたしかな歩み、目ざめた生活なのです。つまり光明土―浄土に向かつての生活は光りにつつまれた生活であり、摂取不捨の道中であります。どれ程、煩惱に狂わされることがあつても、流されることはないところから正定聚不退転といわれます。

船が停泊すれば碇がおろされます。碇がおろされていたら、その船は流されることはありません。信心の生活とは本願の大地におろされた生活といつてよいでしょう。それは光明に摂取された生活でありますから、底が明るのです。

浄土にふれた生活、それを大経には「心得開明」といい、「耳目開明」といわれています。耳が開かれ、目が開かれるのです。浄土をうたがう人は、無眼人、無耳人といわれています。耳が開かれるとはどういうことなのでしょう。言葉がきこえる、業の異なる相手の言葉が素直にきこえてうなずいていける、そこから心が通じていくのであります。

曾我先生がかつていわれました。浄土は言葉がいらぬ世界であり、地獄は言葉の通じない世界である、人間の世界は言葉の必要な世界である、と。人間の世界で言葉が通じたならば、それは浄土の徳がはたっているからであります。

それに対して目が開かれるとは、事実のありのままが見えるということでもあります。私達はなかなかありのままが見えず、妄想によつて事実を覆うてしまいます。何故こんなことになったのか、どうしてこんな目にあわねばならぬのか、果ては何かの祟りではないかなどとおびえるのです。

福井県武生の正法寺さんといえば故宮谷総長さんのお寺ですが、戦後何年かの台風の時、境内の松の大本が倒れました。それが本堂の大屋根に倒れるか、土塀にでも倒れたら大損害を被るところ、境内の真中に倒れたものですから、台風一過して見舞にきた門徒の人たちは口々にいました。

「矢張りアミダさんのおかげだな」

それをきいて宮谷さんはどなられたそうです。

「何がアミダさんのおかげだ、風のおかげだワ。都合よくいったことをアミダさんのおかげなどうけとつていたら、大屋根にでも倒れたら、アミダさんの信心が吹きとんでしまうワ」

事実をありのままに見つめていけるのは如来の智慧のはたらきであります。

さて地獄への歩みとは、教典によれば「心塞意閉」とあります。地獄の原語はナラカということで、訳すれば「暗冥処」とあり、「無幸処」或いは「極苦処」ともあります。『浄土和讃』には三塗の黒闇とありますが、それは真暗闇であり、幸せを感じることのできない場所であり、することなすこと苦しみの因になる境遇のことでありましょう。従つて地

獄に向かっている生活とは自然に、その心は塞がれ暗くなつて、愚痴しか出ない方になることでしょう。愚痴の痴は智慧の病、智慧は光明ですから、光りが病んでいるということです。

よく幽霊が出るとか、出ないとかいわれますが、幽霊とは死にきれぬ相です。成仏することができないから幽霊になるのです。あんなことがなかったら、こんなことがなかったらと、いつてもどうにもならない過去の出来ごとが愚痴になつて、今の私の口の中に出てくるのは、実は幽霊ではないでしょうか。愚痴をいつている人は青い顔をして、暗い表情をしています。過去の出来ごとが成仏していないから愚痴になるのです。

今、念仏に遇うことによつて、あの時あんなことに出あつたが、あれはあれでよかった、あのことにあつたから目覚めることができた、尊い御縁であつたとうけとれるなら、あの時の出来ごとがすべて成仏したのであります。もうそこには幽霊の出ようがありません。しかし又、愚痴は出ることでありましょう。明るい愚痴が。出てくる愚痴が念仏によつてすべて転ぜられていくなれば、それは既に浄土に向かつて歩んでいる証拠であります。

四、処を得る

凡夫のことを「異生のもの」といわれますが、異なつて生まれ出たものの、業が異なつて生まれたものという意味です。実際、この世に生きているもの、同じものは何一つとしてありません。容貌、性格、生い立ち、その人の人生の歩み、それから指紋から声に至るまで、すべて異なつています。まさに「有量の諸相」であります。

同じ親をもち、同じ家庭の中で成長しても、兄は消極的であるのに、弟は積極的ということがあります。姉は温和だが、妹は気性が激しいということがあります。親子であつても、親は商才があるのに、息子はその方は親に似ず、その代わりに学問においてすぐれているということがあります。真似ることもできず、歩みを同じくすることもできません。大経に「無有代者」とありますが、まさに代ることはできません。

色とりどりのチューリップを咲かせている家がありました。赤、白、青、黄、黒と、妍を競つて美しく咲いています。赤には赤の美しさがあるし、白には白の良さがあります。青には青の持ち味があるし、黒には黒の重厚さがあります。太陽の光に照らされて、それぞれの花は自分を一ぱいにつくして咲きほこつています。自慢もなければ卑下もありません。まさに「各々安立」であります。

過日、大阪城の石垣を見に行きました。大阪府庁の前から大手門をくぐると、まず目につくのは大手枿形の巨石です。大阪城の石垣の特徴の一つはすべて石で構築されてあることだ、とあります。遠くは備前岡山から、小豆島、家島、近くは御影石から河内近郊の花崗岩までが使用されているとのこととあります。この大手枿形の巨石は城中第二の巨石であるとされています。

さて桜門をくぐつたところに桜門枿形の巨石があります。備前岡山の大名池田忠雄が豊臣秀吉をおそれ担当したのですが、城中第一位のもので、良質の花崗岩とのこととです。通常タコ石ともいわれ、高さ五・五米、幅十一・七米、重さ百三十噸、畳を敷けば三十六帖分の面積であると測量されています。そのタコ石の左側にある巨石は振袖石ともいわれ、これまた城中第三位とされています。

大手門にしても桜門にしてもまず目につくのは、この巨石であります。桜門枿形の巨石の左側には振袖石の巨石があり、反対側の右の方には細長い縦石や、その上には三角の形の石がおかれています。まだその他に大小多くの石が積み重ねられて、この城壁をつくり上げているのです。しかし、私たちの眼につくのはこの巨石だけであつて、他の石はチラッと目に入るだけであり、ほとんど注意を払われることはありません。

しかし、この城壁をつくるものはこの巨石ではありません。かえつて目につかない三角形の石や、細長い石、小さい石が大事な意味をもっています。これらの巨石でない石たちが、巨石を巨石たらしめ、また城壁の一隅をまもっているのです。これらの石たちはこの城壁をなりたせているのは自分たちだという誇りさえみえるようであります。目につかぬからといって、小さいからといって、形が悪いからといって、少しも卑下しているところはありません。すべては堂々としています。

巨石が巨石であるのは、巨石の業といえましょう。細長い石も三角形の石もその石の業で、誰のせいでもありません。自らの業を背負つて、その業を果たしているのです。その業によつて置かれている場所に、上であつても下であつても、真中であつても隅であつても、他をうらまず自らをひがまず、かけがえのない場所であると、その場所に落ち

着いているのです。ブロックならかけがえがありますが、この城壁の石だけはかけがえがありません。それぞれがそれぞれの場所に落ち着いて、処を得ているのです。これまた、「各々安立」であります。

この城壁の石からいろいろのことが教えられました。わたしはわたしでよかったのです。わたしがわたし以外のものになることはできませんし、又なれはしないのです。「そのまま」と教えてくれています。それでよかったのだ、そのまま一ぱいに生きていくのだと、この石たちは教えてくれているのであります。

五、浄玻璃の鏡

榎本栄一さんの『群生海』の中に「浄玻璃の鏡」という詩があります。

どこ　とりあげても

感心できる自分でない

もし浄玻璃の鏡があつて

映しだされたら

恐れいりましたと

頭をさげるほかない

というのがあります。私たちが仏法をきくということは、どこどこまでも自分をほり下げていくことであつて、決して向上していく、偉くなつていくということではありません。聞けば聞くほど、感心できる自分でないということが、明らかになつていくことなのです。

よく仏法をきいて、偉くならねばならないとか、信心を得なければならぬとか、覚えねばならないとか、喜べるようにならねばならないとか、「ねばならない」という心で聞くのであつたならば、おそらくこれは真宗の聞法とはいえないであります。

「なろう」とする心、これは自力のはからいであります。なれはしないのに、なれるように思っているのです。讃岐の庄松に、聞法の帰りに友はいました。「ありがたいお話であつた。日頃の邪見の角が折れたわな」

庄松はすかさずいいました。

「ほう、邪見の角が折れたか。折れた角なら又、生えねばよいがのう」おそらく相手は啞然としたことでしょう。続けて庄松はいつています。

「わしは角の生えたままと聞かせてもらつたぞ」

聞けば聞くほど、角の折れぬ自分が知らしめられていく、それしかないのです。角が折れてよくなつていくなどということは、あり得ないことであります。

腹も立たなくなつてきた、欲も少なくなつてきた、やさしい言葉も出てくるようになってきた、人に親切心で向かえるようになってきたと、聞法によつて向上していくのではなく、こんなことに出あつたら腹の立つ自分であつた、こういうことに出あえばきつい言葉の出自の自分であつた、あわてふためく自分であつたと、一つ一つの出来事を御縁として、自分が見えていく、そして聞けば聞く程、お粗末であつた、無能者であつたと、恩にかえらしめられていくのが、南無阿弥陀仏のところであります。

清沢満之師は自らを「臘扇」と号されました。十二月の扇子ということ、世の役に立たぬものということであらわします。自らを無能者と自覚されたのは如来にあつての自覚でありました。鏡が遠くにある時は、自分を明確にとらえることはできないが、鏡が近くにある時は、はつきりと自分がうつし出されます。煩惱具足と信知せしめられたのは、如来が近づかれたからであります。

『地獄草子』にみる閻魔のその顔は怒りで真赤になり、その眼は大きく見ひらかれてするどく、口は大きく開かれて、耳もまた大きい。その前に青鬼とか赤鬼が鉄棒をもつて、罪人の頸筋をおさえています。地獄におちながら罪人はその悪業をまだ否認しようとするのでしょうか。その前には浄玻璃の鏡がおかれています。どれ程かくしおおせても、水晶のようなその鏡の前に、自分の罪業のすべてがうつし出されてくるのです。そこではじめて、おそれ入りま

したと、頭が下がってくるのでありましょう。つまり浄玻璃の鏡を前にして、罪人はじめて自分に遇うのです。その場所がなんと地獄であつたのです。地獄までおちなければ自分にあうことができなかったのです。

『愚禿悲歎懷和讃』にみる宗祖の言葉―「貪瞋邪偽」といい、蛇蝎とたとえ、無慚無愧といわずにおれなかったその心境は、自己の中に地獄をみておられたのでありました。如来にあうことによって、地獄を蔵した自己であつたとまで深まっていかれたのでありました。

浄玻璃の鏡、つまり鏡のあるのは地獄だけであつて、他の惡趣には鏡はありません。ということとは、餓鬼にしても、畜生にしても、そこでは自己にあうことができないということでありましょう。地獄におちてはじめてすくわれる、地獄の底にこそ極樂の門があつたのでしょう。まさしく浄玻璃の鏡を前にして、南無せしめられるのでありました。

六、分限に生きる

清沢満之師は「我等の大迷は如来を知らざるにあり、如来を知れば自ら分限あることを知る」と、述べられています。如来を知るとは如来に遇うということで、そこではじめて分限が知らされるのであります。分限が知られ、分限にうなずけたということは、如来に遇つたからなのです。

福井の竹部勝之進さんに「分限の唄」というのがあります。

分限を知らしてもらい

自分に出来ることをやらせてもらう

たのしからずや

分限を知らしてもらい

安心して生きさせてもらい

安心して死なしてもらう

たのしからずや

分限を忘れると、出来ぬことまで手を出します。出来ぬことに手を出しますと、必ずそこに苦しみがおこってきます。よい格好をすることはいりません。きばることもいらず、見栄をはることもいらず、背伸びすることもいらず、できることをさせてもらつたらよいのです。

さて、わたしの分限は何であつたか。凡夫であつたのです。「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫」(pg29)と、如来よりわたしの分限までいいあてられていたのであります。そして更に「一生凡夫にてあるべきなり」とまで明らかにされていたのです。それを忘れて、あなつて、こうなつて、或いは心をしずめて仏に近づこうとし、よいことをして仏に近づこうとし、はからつてばかりいるのです。なれぬことを知らずになれることのように思つて、もがきあがいているのです。それは如来の分限にまで手を出していることになつていけるのです。

自分の分限を知らせてもらえば、出来ることだけをさせてもらえます。凡夫にできることは何か。仏に近づくことではなくて凡夫にかえることなのです。煩惱具足の凡夫、罪惡生死の凡夫であることにうなずいていくことしかありません。南無阿彌陀仏と称える、この「称」を聖人は「かなう」とよんでおられます。「かなう」とは適合する、ピタツとあうということ。仏に適合するのでなく、凡夫に適合するのです。してみれば称名念仏ということは、たえず私を凡夫の場に引きもどして下さるはたらきであつたと、うけとれるようです。

自分の分限を知らせてもらえば安心して生きさせてもらえます。安心して生きるとは、別に樂になることでもなく、苦悩がなくなることでもありません。背負い果たさねばならない宿業はどうにもなりません、それを背負つていける私になるということです。果たしていける私になるのです。「重荷背負つて山坂すれど 御恩思えば苦にならぬ」と、よんだ人もありました。

自分の分限を知らせてもらつて、安心して死なせてもらう、と竹部さんはよんでいます。明治のころ、一青年求道者が死を前にした念仏者に問うています。

「あなたは今にも死を迎えようとしておられます。さてあなたの後生は明るいでしょうか、暗いものでしょうか」

その問いを非常に喜び、こう答えています。

「わたしの後生は明るいようであるし、暗いようでもある。しかし、こちらの方で明るいのか、暗いかをきめねばならないなら、無になる方があるでなあ」

明るくしてくださるのは如来の分限で、凡夫のきめることではありません。凡夫は最終臨終まで煩惱が、とどまらず、きえず、たえずの状態なのであります。如来の仕事に手を出してはなりません。ただあるがまま。両手はなしたまま。手ぶらのままなのです。

数年前、大阪国立大学の耳鼻科の教授が、癌になられたとき死を迎える自分の表情を逐一、カメラにとつてもらい「ガンかて笑つて死ねるんや」と、がんばられました。さすがに最期は「きついな、早く楽にしてくれ」と絶叫されたときいています。なにかそこには悲愴感がただよっているようです。わめいたらよいのです。泣いたらよいのです。こわがったらよいのです。

禪者であつた博多の仙崖和尚は、死に臨んだとき、弟子から最期に一言と問われて「死にともない、死にともない」と、答えました。あまりにもめめしい言葉に「更に一言を」と、いったのに「ほんまに、ほんまに」と、答えましたが、なにか心にホツとさせるものがあるようです。

七、すべておあたえ

この頃、私は「すべてがお与え」と思うようになりました。すべてがお与えであると気づいた時、そこに意味がみつかつてきます。越後の念仏者貞信尼は「要るものはお与え下さる。要らぬものは捨てさして下さる」といつています。求道の上で、私にとつてどうしても必要なお与え下さるし、仏道を歩む上に、私にとつて不必要なら、すてさして下さるのです。

すべてがお与え。この私は都合のよいものはうけとるし、都合の悪いものはうけとらうとしません。私の都合のよしあしをこえて、一切がお与えであるとうけとつていくのです。「一切」ということが大事です。仏教の精神は「一切」ということです。たとえば「一切皆苦」ということがいわれます。

一切が苦である。あるのも苦、ないのも苦。健康であるのも苦、病氣であるのも苦。財あるのも苦、財のないのも苦。子あるも苦、子のないのも苦なのです。それが転ぜられて、一切がお与えであるとうけとらしめるものがナムアミダ仏でありました。

ナムアミダ仏とは智慧であります。転成の智慧であります。

金子先生は一字説法の「転」の項で、転とはコロゲルである。立場を失つたのである。しかれば成は、立ち直りか。南無とコロゲて、阿弥陀と立ち上がる。それが転成の正智である、と述べられておられます。一切が苦であるとしていた立場が失われて苦であることにかわりがなくても、それをうけとつていけるとき、これもお与えであつたと、立ち上がつていけるのであります。

無始以来つくりとつくる悪業煩惱として、どれ程かこの煩惱をもてあましたことでありましょう。真面目な求道者であればある程、この煩惱で苦しんだものでした。しかし、この何としてみようのない煩惱が、実はお与えであつたとうけとつたとき、この煩惱がかえつて菩提心をもえたたしていくのではなかつたでしょうか。

凡夫であるということは、煩惱が熾盛であるということであらわします。腹も立たず、欲もおこさず、泣き言一つもいわないで、いつもしずかに微笑して泰然自若としておられるような人、偉い人であるかわかりませんが、宗祖聖人のお言葉をおかりすれば「あやしう候いなまし」(p630)であります。

実は煩惱が熾盛であればある程、それが転ぜられたとき、菩提心をたしかなものにする要素になつていくのであります。瞋恚のために親鸞聖人を殺害しようとかまではかつた山伏弁円は、聖人にあい、転ぜられて、生涯を仏弟子明法房として誕生しています。柿の渋さが、太陽の光に照らされて甘さに転じていくようなものです。

「名聞さまがあるので御恩がよろこばれる」といった人もあるし、「今までは悪(煩惱)を敵と思ひしに、悪こそわれらの智識(善知識のこと、わたくしを育てみちびいてくれる人のこと)なりけり」と、よんだ人もあります。仏道の上に立つて、煩惱はお与えであつたと、うけとれるのであつて、仏道という一点を外したら、煩惱はまさしく身をわずらわし、心を悩ます精神作用になつてしまします。

まさにすべてがお与えであつたのです。

健康であることもお与えであれば、病氣であることもお与えなのです。お与えという一点を忘れますと、健康であることが何ら喜ばません。そして病になれば、自分だけが何故、こうして苦しまねばならぬのかと、他をうらみ、家族のものに当たりちらして愚痴しかでない暗いものになってきます。それがお与えであつたのだなと気づいた時、そうだ、健康であるために仏法のお役に立つことができるのだ、仏法のお役に立つために健康が与えられているのだと、うけとれてきます。

病氣になつた、平素あくせくと我が身忘れて走りまわっていたこの私に、静思せよ、人生を深めよ、自分をみつめよという機会があたえられたのだ、とうけとつていけるのであります。働くとは働くことだけではありません。感ずるという働きもあつたのだなと、開かれていくのであります。足の悪い人が、ゆつくりとしか道を歩むことができない、これはゆつくりと、一步一步、人生を味わつて歩めというおはからいであつたんだな、病恩だな、といつておられます。すべてがお与えということから、ひらかれる境地であります。

八、みてらん火

たとい大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなうなり

(浄土和讃 p481)

「みてらん火」とはどんな火のことなのか、実は早くから気になっていました。柏原祐義著『三帖和讃講義』によりますと「みてらん火」の「みてらん」には「満ちてあらんという意」であるとされ、たとい三千世界が火になつてあるとしても、私共はその火の中をこぎわけてなりとも、これを聞かねばならぬという大決心をもつてかからねばならぬ。つまりどんな苦勞災難に遇つても、それをいとわず命がけで聞くという大きな決心が肝要である、とあります。これが本来の意味でありましょう。

しかし、私は「火」とは何かということを考えてみたのです。「火宅無常の世界」という言葉があります。「火の河、水の河」「火焰常に道を焼く」。そして、煩惱には火がついていますし、煩惱熾盛として、火のさかんに燃えるというあらわし方がしてあります。さかんなる煩惱に対して、如来の智慧のはたらきを光炎王仏として、光明熾盛とあらわしておられます。

「火」を煩惱とおさえたとき、「みてらん火をもすぎゆきて」というのは、どういうことになるのでしょうか。煩惱の世界を通り過ぎてでもきかねばならないということになってきます。何か煩惱と自分とが別であるような感じがするのですが、実は私とは煩惱そのものであつたのです。聞法を重ねることによつて「みてらん火」とは私そのものであり、聞法を通すことによつて、益々、煩惱の深さが信知せしめられてくるすがたが「みてらん火をもすぎゆきて」ということではなかつたか、と気づいてきたのです。

一つ一つの煩惱を通していいよ「凡夫というは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲も多く、怒り腹立ち、そねみねたむ心多くひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらずきえずたえず」ということが自覚されてくるのであります。それこそが又、私を不退の位に住せしめるのであります。

金子先生が九十歳を越えて、もう少しすつきりするものがあるのではないか、と思つていたのに、何か若い時より愚痴っぽくなつてしまい、だんだん始末のいかない自分の心を感じる、と述べられ、清沢先生の「信心をいただけは、人間の心はだんだんよくなるのだというけれど、そうではない、だんだん悪くなつていくのではないか」という言葉を引いて、自分の心を告白しておられます。実際、長く生きれば生きる程、人間の根性というものは悪くなるんじゃないかなあとも、述べられています。

「みてらん火」などと思われぬものですのに「みてらん火」と自覚信知せしめられるのは、まさしく光明に照らされているからであります。「大海の水の深さは知れても、人の心の深さは知れない」と、教典にあります、光り

に遇つたすがたが「みてらん火」であり、その深さがみえていくことが、つまり「すぎゆきて」ということではないでしょうか。

聞法は歩みであります。自己が深まっていく歩みなのであります。深まるとはただ煩惱熾盛の信知だけではなく、光明に摂取されていくすがたでもあります。触光柔軟といわれます。煩惱が触光のところに、そのままでおわらない柔軟のはたらきをあらわしてくるのです。

怒り腹立つ煩惱が光りにつつまれて、おはずかしいことであつたと、頭の下がるところに怒りが純化されてくるのです。蓮如上人はよく腹を立てられましたが、仏法の怒りでありました。宗祖聖人にもそれがみられます。欲の心は私の人生の方向まで狂わせてしまいますが、光りに遇つたときには、仏にならんとする願ひにかわつてしまいます。それは光明、すなわち智慧が転悪成徳のはたらきをするからです。それはごく自然に、たくまずにそれをなしとげていくのです。

何故こんな目にあわねばならないのか、どうしてこんなことになつたのか、あの時あんなことがなかったらというとてもない愚痴が、実は如来の光明に摂取されて、あれはあれでよかった、あれを通らなければこのことに目覚めることができなかったと、愚痴の材料が如来のよびかけと、納得してうけとれていくのであります。このような意味を「みてらん火」という言葉の中から、うけとらせてもらつたことであります。

九、人間の唄

竹部勝之進さんの詩に「人間の唄」というのがあります。人間とは如来に願われた存在であります。願われた存在である人間が、願ひに生きる存在になつてこそ、本願が成就したことになるのです。はからずも「人間の唄」はこの願ひに生きるすがたをうたつたものでありましょう。

人間ノ唄

人間ニナリマシヨウ

自信ヲモッタ人間ニナリマシヨウ

何モノヲモオソレナイ人間ニナリマシヨウ

三歳ノ童子ニモ学ブベキコトヲ学ベル

人間ニナリマシヨウ

そんな人間として成就するのか、自信をもつた人間、何ものをもおそれない人間、三歳の童子にも学ぶべきことを学べる人間になつていくのであります。

推うに、人間の自信ほどあてにならぬものはありません。それは自分の経験、苦勞、人生観からつちかわれたものであつて所詮は、自分の主観で固めた確信であります。この時はこうして、こういう時はああしてと、計算どおりに行っているときはそれでよいのですが、人生は計算どおりには運びません。そのときははかなくも、固めた自信が崩れ去ることでありましょう。

ほんとうの自信とはどんなことでしょうか。それは如来の力がわが力となつて下さつたことであります。

如来の力、つまり本願力がわがものとなる。「信心獲得すというは、第十八の願を心得るなり」(p834)とあります。獲得する。わがものとなるということです。如来の力がわが力となつたときそれがほんとうの自信となつてくるのです。

清沢満之師の言葉に、「我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け、我、他力の救済を忘るときは、我が世に処するの道閉づ」とあります。世に処する道が開けるとは「虚心平氣」に生きることであり、楽に生きる、きばらずに、ゆうゆうと生きていけるということです。よい格好をするのでなく、背伸びするのではなく虚勢をはるのではなく、おおらかなゆつたりした心で生きていけるのであります。

禅者の言葉に「水急不流月」水急なれど月を流さず、というのがあります。大雨になつて洪水となり、すべてのものをみな流してしまふ。家も、橋も木も人も。その中にあつて濁流の中に移つた月影は流れないということでもあります。

教養も学問も常識も修養も、地位もたしなみも、人生に於ける問題のときは、たくみに対処していきます。しかし、自分の人生そのものが問題となったときには韋提希夫人と同じように、濁流でおしながされてしまいますが、獲得された如来の自信は、流されることはない、ということをお教えてくださいます。

如来の自信で生きる人は、何ものをもおそれることはないのです。つまり「虚心平氣」に生きられる。虚心平氣とは「虚心坦懷」と同じ意で、何のわだかまりもなく、さっぱりして広く平らかな心と、辞書にあります。先入観をまじえずに素直に事実をうけとつていける心でありましょう。

我が身におこる出来ごととはさけることもできず、にげることもできません。おこるときは因縁和合しておこるのだと、うけとつていく。日が悪いのだとか、何かの祟りだとか、そのような雑物を入れないでうけとつていける心こそ、如来の自信のはたらいている相でありましょう。一たびうけとれば、あわてず、あせらず、くさらず、じつくりとうけとつていくのです。国道で車が渋滞することがよくあります。車の中でどれだけイライラしても、何ともなりません。流れにまかせるとありません。どれ程、ノロノロしていてもいつかは解消します。車の流れにまかせて窓の外をながめておれば、

よく見ればナズナ花咲く垣根かな

気もつかなかった気色にも気がつくし、思いもつかなかった世界のあることにも気づかしめられてきます。

問題に出あう度毎に何故こんなことになったのか、何故自分だけがこんな目にあうのか、あの家では、あの人があんなにうまくいつているのにと愚痴る心が「わたしにはこれがよかったのだ」と、ひらかれてくるのであります。

岩もあり 樹の根もあれど

さらさらと たださらさらと

水の流るる

私の好きな歌の一つです。

一〇、仏道をなろう

前回につづいて「人間の唄」という竹部勝之進さんの詩ですが、「三歳の童子にも学ぶべきものを学べる人間になりましょう」という一節について考えてみたいのです。学ぶといってもそれは知識の面ということではなく、あくまでも仏道に立つてのことで、道元禪師の有名な言葉「仏道をなろうというは、自己をなろうなり」とありますように、自己をなろうとは、自己を明らかにしていく、これしかないのであります。それは求道という言葉でもあらわせますが、又、換言すれば成仏道ということでもありましょう。

三歳の童子ということとは、仏道を立場とするならば、学べるなどと思われないようなことから、学んでいける。いや、学べるとみられるものよりも、学べそうにもないと思われるものの方が、かえってわたしを教えてください、ということであらわしているようです。親鸞聖人はそれを「よくよく按ずれば」という言葉であらわされました。よくよく思按する。胸に手をおいて按じみるならば、ああそうであったか、こういうことを通して、このわたしを目ざめさそうと呼びかけていて下されたのであったかと、うなずけてくるのであります。

わたしのことで恐縮ですが、長い夏休みを利用して息子がアルバイトに行きました。五時すぎに帰ってきます。ところが注文が多くなつて超過勤務になったといつて七時すぎになるときもあります。七時すぎの時は、帰るやすぐに食膳に向かいます。

ある日、わたしは家の者と大阪市内まで買物に行きました。ふと気がつく、もう五時すぎになっています。今から帰っても六時すぎになってしまう。超過勤務のときなら間に合いますが、五時すぎに帰っていても矢張り、おなかを空かして待っているだろう、今から帰って御飯ごしらえをしても間に合わぬ、おすしでも買って帰ればすぐに食べられるだろうと、買物をすませて帰宅しました。その日は五時すぎに帰って、おなかを空かせて待っていました。

「いまごろまで何していたのや、腹すかして待っていたのに」となじります。

「そうか。ついおそくなつた。すし買ってきたぞ」

「早くしてくれ、早くしてくれ、待つ身にもなってみよ」

とえらそうにいますので、ついわたしも腹が立つてきました。

「七時の時もあるじゃないか、五時に帰るなら、五時といっておけ。お前のアルバイトではないか。お前の都合に合わせられるか」

「五時か七時か、会社に行かねばわからん。腹がへったら腹が立つんだ。早くくわせてくれ」

「自分でくえ、あまり勝手気儘なこというな」

と、叱りつけました。実際は、もつとはげしい言葉のやりとりがあつたのです。久しぶりの親子喧嘩です。すると息子はわたしをにらみつけて、こういつたのです。

「えらそうなこというな。おやじもいつもやつとるじゃないか。帰る時間もいわずに出て行つて夕方突然帰り、御飯にせよとガンガンいつて、勝手気儘なことやつとるじゃないか」

ガツンと一発くいました。

やつていたのです。全くその通りであつたのです。そこには親などと偉そうなことのいえない自分が知らされたのです。家の者に当たりちらしているわたしの相をみて、おそらく息子はやりきれなかつたことでしょう。息子はわたしの相をみせてくれたのです。わたしは息子を縁として私に遇つたのでした。そこからお粗末な人間であつたな、はずかしいことであつたなと一つ学んだことでした。すると息子はわたしにとって、仏であつたと見なおしていけるのです。

親鸞聖人は『浄土和讃』の中で、提婆尊者と書かれ、その下に阿闍世王、雨行大臣、守門者と並べて書きそえられています (p.83)。惡逆無道の提婆を尊者とされ、惡の加担者、惡にまけた人たちにまで一々の名前をそえられたのは、わたしの仏道を莊嚴するのに欠かすことのできない人たちであつたという立場で仏道をうけとつていられたのです。どの一つ欠けても邪魔なもの、捨てざるものはなかつた。邪魔ものと思つていたものが、かえつてわたしの念仏道を明らかにしたのであつたとうけとつたとき、実はわたしの生涯が学びの道として歩んでいけるのでありました。

一一、いのちの底に

親鸞聖人にとって信心とは、かぎりなく内に問い求めていく自己を問題とし、自己をあばき出していく、そして買いかぶつていた自分でない本当の自分、自惚れていた自分でないかけ値のない自分、夢からさめた自分と出あつたということなのであります。「決定して自信を深信する」といわれますが、わが身を見きわめたということでもあります。

そのわが身が見きわめられ、信知せられたところに、もう一つ見えてくるものがある。それを「決定して乗彼願力を深信する」という言葉であらわしておられますが、実はアミダの願いがわたしのいのちとなつて、いのちの底によこたわつていたということなのであります。そのいのちとまでなつて下さつたアミダの願いに遇われた、これが聖人にとつての信心の事実であつたのです。深くわたしに出あうところに、このアミダのはたらきに目ざめてくる。アミダとはわたしを離れて遠いところにおられたのではなく、近いとも近いとも、実は自分の足の下において、知らずにわたしはそれを踏みつけていたのであります。いかに踏みつけられても、アミダ如来はこのわたしを支え、このわたしを生かしつづけて下さるのであります。

生涯「根を養えば樹は自ら育つ」という信念で、子供の教育に情熱を注がれた東井義雄先生は、兵庫県のへき村の真宗のお寺の住職であります。寺に生まれたのに神も仏も信ぜられず、この世の中が変革されなかつたら子供の幸せも成り立たないといった考え方であつたといわれます。

その先生に小学校の高等科の子供が質問しました。

「先生、あーと口をあけると喉の奥にベロンと下つた不細工なものがありますが、あれは何をするものですか」

あれは口蓋垂といつて、口からたべた食物が胃袋に入る食道の道と、鼻から吸つた息が肺の方に行く気管の道と、ここで分れている。その分れ道で食物が道を間違えて気管の方にくと窒息して死んでしまいます。そういうことにならぬように、食物をのみ込むときにはピタッとあの喉の奥の口蓋垂が気管の蓋をしってくれる。そのおかげで間違い

なしに、食物が胃袋に入っていくのです。

これがわからなかったから、先生知らんわい、今日帰って調べてくるでなあ、明日まで待つてみてくれや、ということであつた。いろいろ調べてよくわかったといわれます。そして、そのような大事な役目を果していただくのに、それもわからず、済まんなあと思つたこともなく、有難いなあと思つたこともなく、ごく当り前のごとく思つていたこのわたしが、気づく前から大きないのちのはたらきのなかに生かされていたのであつたなあ、気づかれたことであつた。

アミダの願いが、わたしのいのちとなつて、わたしを生かして下されたのであつた。このことに気づいたとき、どのような一生であつても、ありがとうとその一生にお礼がいくつになつてくるのです。人には人さまさまな行き方があります。このことに気づかなかつたら、自分の甲斐性でこうなつたのだと、おごりたかぶつたり、もう駄目だ、自分ほどじめなものはないと悲観して、自らのいのちを絶つたり、家族を道づれにして一家心中をしたりするようになつてくるのです。

わたしのいのちの底にあつてわたしを支え、わたしを生かしてくだつた無限のいのちのはたらきに目ざめたとき、わたしはわたしなりに一ぱいに生きたらよかつたのです。人それぞれには分があります。分を越えることはできません。分相應に生きていく、それが信心の生活といわれるものでしょう。

金子先生がなくなれる時の最期の言葉を、広瀬先生がテープにとつておられます。

「何か言おうということになると、もうただ、ただ、ありがとうございますということの他には何もありません。自分の気持ちとして素直に伝えるのは、このことの他には何んにもない。一生生かしてもらつてありがとうございました」

アミダのいのちに生かされつづけられた信心の行者のすがたを、いまここに見せていただくことであります。

一二、転の智恵

「窮スレバ通ズ」という言葉があります。窮するとは行き詰まる、逆境、貧乏、困難に追い詰められて苦しむという意味ですが、この「窮スレバ通ズ」という言葉の意味として、行き詰まつて困りきると、かえつて活路が見出されることがある、となつています。しかし、この言葉は誤りであつて、ほんとうは、「窮スレバ転ズ、転ズレバ通ズ」というのだときいたことがあります。実際その通りで、転ずるといことがなければ、通ずるといことはありません。たとえば路地に迷ひこんだ、行き詰まりになつていて、これが窮するということです。窮してもどうにもなりません。そこで引きかえす、方向転換をします。すると、こんなところに道があつた、ということがわかつてくるのです。転じてこそ活路が見出されてくるのです。

「転」とはくわしくいえば「転悪成徳」ということで「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智」(p149)とあります。悪とは煩惱、そのどうにもならぬ煩惱を方向転換させてくれて功德となす、あれはあれでよかつた、あのこともあのことでよかつたと落ち着かしめてくれるはたらきが、南無阿弥陀仏であると、宗祖はのべておられます。それにしても金子先生が晩年「一字仏法」の中で「転」ということに施された解釈におどろいています。「一字仏法」とはただ一字をもつて、真宗仏教のこころをあらわそうとなさつた試みなのです。「愚」「如」「命」「円」「遇」等々という字がとりあげられています。そしてこの「転」という言葉に「コロゲル」という意味づけをしておられます。たしかにその通りなのですが、私は今までそのことに気づかなかつたのです。

「コロゲル」とは足場が失われた、自分の立っていた場がなくなつた、つまり今の今までそうとしか考えられなかつた立場が失われて、待てよ、このようにも見直していけるのであつた、こんな気のつかぬ道もあつた、と立ち上がつていくことができた、ということが転の智恵であります。南無とコロゲて、阿弥陀と立ち直ることである、といつておられます。

最近の人間の考え方はあまりにも単純に、直線的になつたようです。直線的とはまっすぐに考える、平坦な舗装道路を歩むように考えて人生を生きていく、ところが人生は凸凹道路ですから、水たまりもあれば、石ころもおちている、狭いところもあれば、通れそうもない危険な箇所もあります。そういう所に行き当たるとすぎにまごつくのです。或いは自殺さえしてしまうのです。なぜもつと心の中にゆとりをもつことができないのか。少々の失敗や逆境をおそ

れることのない人間になれないのか。広い心をもって、待てよと考え直していくことができないのか、と思われるのです。

東井義雄先生がすばらしい言葉をのべておられます。東井先生は何か行事をしようとすると雨が降る、いつか東井先生のことを「雨降り校長」とあだ名するようになったと、いわれます。先生は次の言葉をはり出されました。

雨が降ったからといって

天に向かってぶつぶついうな

雨の日には 雨の日の

生き方がある

世の中にはさけられることと、さけられないことがある。さけられないことにあつたからといって、ぶつぶついつてはならないのです。

失敗したからといって、ぶつぶついうな、逆境にあつたからといってぶつぶついうな、病気になるからといって、ぶつぶついうな、病人には病人の生き方があるのです。年とつたからといってぶつぶついうな、老人には老人の生き方がある、まさに転の境地であります。

身体の柔軟な人は、よし転んでも直ちに立ち上がることができます。それにひきかえ、身体の硬い人は立ち直ることができるところか、身体の骨を折るかもわかりません。それと同じように心の柔軟な人は巧みに立ち直っていくことができるのですが、心の硬い人、頑固な人、人のいうことに耳を傾けることのできない人、自分の主義主張をまげない人は、その剛直な心のためにかえって行きづまってしまうのです。如来の本願に「触光柔軟の願」があります。光りに触れるもの、みな身心柔軟にならしめたいと誓われたのですが、その誓いがいま南無阿弥陀仏となつて、転の智慧となつてはたらい下さるのであります。

二

一、信心の行者

親鸞聖人のお聖教の中に「行者」という言葉がよく見られます。特に『歎異抄』には「一室の行者」「同心の行者」「信心の行者」などと、つかわれています。仏教辞典によれば、「行者」とは、仏道に入つて修業する人のことで行人ともいう、いま一つは山伏、修験者の通称とあります。普通、行者といえば後者の場合にとられています。いまそれを特に聖人は「信心の行者」として、浄土に向かって仏になる道をあゆむ者、願生道をあゆむものとしておさえておられます。世間ではよく信者ということをいいますが、聖人では信者というところにとまるのでなく、生涯、無上正真道をあゆむ行者なのであります。

いま唯円が『歎異抄』において「信心の行者」という言葉をつかっていますのは、仏になる道をあゆみつつけられた祖師聖人が、特に晩年になるほど、旺盛な仏法のお仕事に全力をそそぎつづけられた、そのたくましさ、その情熱、そのおすがたを目のあたりにみていた唯円にとっては、「信心の行者」としか表現することができない聖人そのひとのことではなかったか、と思われるのであります。

さらに、聖人の御和讃にみられる「つつ」という言葉のつかい方。それは「弥陀の名号となへつつ」「真宗念仏ききえつつ」「本願他力をたのみつつ」「浄土真宗をひらきつつ」等々にみられます。「つつ」とは、動作、作用の進行中であることをあらわします。それと共に疑惑和讃には「とまる」と、つかわれています。どこにとまるのか、辺地、懈怠、疑城、胎宮にとまるとあります。

辺地とは辺びな片田舎、片隅ということですが、人間のひがみ心、ひねくれ心ということでしょう。仏智不思議を信ずることができず、順逆ともに如来のお育てであることにうなづくことのできぬひねくれた心であります。従つて

そこからは、無碍の一道はひらかれてはまいりません。懈怠とはなまけ心、精進の心のない状態をあらわします。鈴木大拙先生が『教行信証』の英訳にかかれたとき、死神と競争してでも、この仕事をなしとげたいといっておられます。先生は昭和三十一年に東本願寺より依頼をうけられ、同三十四年(先生八十九歳)「教」「行」が、同三十六年(九十一歳)に「信」「証」の英訳草稿ができましたとき、ある放送記者が先生にインタビューをしています。(昭和四十八年十一月号『真宗』)

「英訳の動機は何ですか」

「動機も何もありやしない、これを訳さねばならないというのは、宝がこつちにあるなら、やつぱし世界にみな見せなくちゃならず、ね」

「親鸞の教えを世界にひろめようというような考えはなかったわけですか」

「広める、広めぬじゃないんだ、みなが知っていないくちや困る、そういうことになりますな」

「英訳されて、いろいろな苦勞があつたと思うのですが、最も苦勞されたのはどういうところですか」

「東洋と西洋の考え方が違うから、英語になおすことがむづかしい。一つの言葉を何時間も考えて、それからうつちやつとく。しばらくすると夜中にふと思うことがあるから、そのときやる。だから夜昼なしだ。それからねむければいつでもねむる。夜中に気がつきやいくらでもやる。ごはんもなるべくたべないようにしている。食べるとねむくなつてな」

九十歳をすぎられた先生の、なんとしてもやりとげずばという、その熱氣がひしひしと感ぜられてきます。

疑城とは、求道には必ず疑いが生ずるものでありますが、世間智を肯定しているかぎり、仏智に対する疑いは生じてきません。つまり仏智を疑っていないという形の疑いをあらわしたものです。胎宮とは無難でとおろうとする心、心中をひきやぶるということがなく、もうすでに精神の老化現象でおどろきのたたない、そのような状態をいったものであります。

「本願を信じ念仏申さば仏になる」(p63)とあります。仏であるとはいってありません。生涯、凡夫の身なるが故に、仏になる道をあゆませてもらうのです。水もとまればくさります。人間が人間を成就していくあゆみをとめたら、も早その人の死であります。仏になるといふ本願にめざめたところに人間に生まれた甲斐があり、人生の方向が定まるのです。めざめぬ生活には方向がありません。その時その時の、都合によつて、自分に都合のよいのが人生の方向になります。健康を目標としたり、それがかなえられると、地位になったり、権力になったり、富になったりしてかわります。仏道とは人間成就道であり、いかなる状態にあつても、その願いがゆるぎもしない、その人こそ信心の行者なのであります。

本願の番号について『歎異抄』に「たもちやすく、となえやすき名号を案じいだしたまいて、この名字をとなえんものを、むかえとらんと、御約束」(p630)と、あります。「たもつ」とは、1、手にもつ、2、ある状態をかえずにつづける、3、あるものがほろびたり、衰えたりしないようにささえまるとあります(広辞苑)。この一道は水火二河貪瞋煩惱に障げられて、かすかなものでありましても、念仏がこの本願にめざめた心を、ささえ、保持し、まもつて下さるのであります。

作家水上勉さんが失われいくものの記録の一つとして次のことを書いています。京の三条に岡栄一郎さんという経師屋がおられます。七十何歳かのこの岡さんは日本の国宝級の絵描きさんの書かれた掛軸とか、ふすまの虫食いをなおしておられるのです。この人のつかっている道具の中に、これまで見たことのないものさしが一つ置いてありました。

「古いものさしのようですね」と、きくと、「藤原時代のきれとか、支那の明朝のきれという、一きれ何万もするきれにものさしをあてて、シューと包丁を入れるときの定規です。これは表が桜で、裏が楓になっています」と、いつてその訳を話しました。

「桜は日本の堅い木で、年をとればとるほど自分がつろになつて、皮だけで生きていくつばな木でございます。その堅い幹の部分をこうしてもものさしにしてあるのでございます。ところが、その堅い桜でも、やつぱり桜の曲がりというもんがある。だからもう一つ裏側にこの楓の堅い木で裏うちをしてある。楓一本では又、楓の曲がりというものがある。桜と楓をけんかさしておるわけです。梅雨時になれば、桜はいくらかやわらかくならうとするのを、楓が

ブレーキをかけてくれる。また秋口に楓が色づきかけるのを思い出して、やわらかくならうとするのを、桜は冬を迎えるから堅くなる。そういう性質を利用して、お互いに絞め合わしながら、この定規はまっすぐになっているのです」

仏道にくるいはゆるされません。桜は楓をたもち、楓は桜をたもって、一分の狂いもないものさしになっているのです。ふと願生心のゆるみを念仏がたもって、人間成就を約束してくれるのであります。磁石の針はどこにおいても、しばらくは揺れていても北という方角を取りもどします。信心の行者とは、どれ程煩惱に狂わされても、狂わせられぬ一点を確保して、仏道をあゆむ人のことをいったものでありましょう。

ひとすじのなみあみだぶつをただけ

ひとすじみちにまぎれなし

なみあみだぶを道づれに

さいちのころふかいほど

親のころはこれにまさるぞ

(才市)

二、いかがせん

1

報恩講の結願日中は、声をかぎりに奉唱される恩徳讃をもっておわります。本年も無事につとめさせていただいたという感激にホッとして、お厨子の御真影を仰ぎみ、人生の晩年になっても、根源のいのちの世界を重厚にして格調高く、詠いあげずにおれなかった聖人のお心をお偲びすることでありました。人間の肉体は二十五歳を頂点として、追々と下降線をたどりますが、頭脳は四十二まで上昇し、その人の努力によつては三十年間持続し、七十歳すぎころは次第に衰えを見せはじめるという、医学の発表を見たことがあります。

聖人の仏法のお仕事は、人の心も肉体も衰える時から始まりました。ためにためたものがせきをきつて流れ出すように、筆をとりつけ、しかもそのいのちの若々しさ、みずみずしさ、力強さ、のべずにおれない情熱のほとばしりを、そこに感ずるのです。『正像末和讃』は康元二年聖人八十五歳より稿をおこし、翌正嘉二年九月二十四日に完成しています。そして『末讃』五十八首の最期が、所謂、恩徳讃で結ばれているのです。

しかし、ふと気づいたことですが、「いかがせん」という言葉の和讃が三カ所です。

正法の時機とおもえども 底下の凡愚となれる身は

清浄真実のころなし 発菩提心いかがせん

(p501)

往相還相の回向に もうあわぬ身となりにせば

流転輪回もきわもなし 苦海の沈淪いかがせん

(p504)

往相回向の大慈より 還相回向の大悲をう

如来の回向なかりせば 浄土の菩提はいかがせん

(p504)

「いかがせん」とは、どうしよう、何としよう、何とかならぬか、途方にくれて、あちらを見、こちらを見て弱り果てている状態をあらわしているようです。自力のかぎりをつくし、つくしてみても、清浄真実の心のない、流転輪廻するよりほかない、何れの行も及びがたい地獄一定の身が、はからずも本願に遇いた喜び、聞きがたくして聞くことを得た感動、もし本願に遇うということがなければ曠劫に逡巡しなければならなかつたろうという悲しみ、その相反する真理を「いかがせん」という一語をもつて表現された聖人の心境を、ここにみることであります。まことに、

家庭問題、経済問題、子供の問題で「いかがせん」と、思い悩んだことは何度かあったことではありますが、生死の一大事について「いかがせん」と命がけの問題にしたことがあったでしょうか。

2

メッカ殺人事件というのがありました。昭和四年生まれの犯人Sの父は弁護士、母は夫の死後、女学校の先生をして、子供たちに大学卒業をさせました。成績優秀であった本人は中学半ばで結核になり、病弱のため公立高校に入れず、慶應大学経済学部に入りましたが、当時は不治と見なされていた結核のため、いつしかグレだし、ギャンブルにうち込み賭マージャン、競馬などに熱中しました。大学を出て某証券会社につとめました。投機をやつて会社の金をつかいこみ、その穴埋めのため、たえず情報を提供して金をもうけさせてやつていた株式のブローカーに借金を申し込みましたが、断られました。

怨みに思つて、本人は新橋のメッカというバーに誘い込み、バーテンと共謀してロープを首をしめ、鞆の中の四十万円を奪つて逃げましたが、つかまりました。生涯の非行はこの一件。前科もないところから裁判官は慎重を期しました。東大の犯罪心理学の権威吉益教授が、その精神鑑定を担当しました。獄中『黙想ノート』という書を著わし、印税二十何万円かは、役に立つところに名前をいわずに寄付してほしいと申し込んでいます。他の機関誌にも執筆しましたが、稿料は生きている間に一つでもよいことをしたいと、手にしていません。

吉益教授の精神鑑定はきびしいものでした。

「本人の犯行は環境から生まれたものではない。人間愛とか、同情とか、共同感情、博愛といったような言葉で現される高貴感情が本人には欠如している。無情性精神病質者である。しかも、これは生まれつきの素質で、如何なる教養をもつても、情性の欠如を補なうことはできない」

教育訓練をもつても、本人を愛情をもつた人間にはなし得ないと、断定されたのです。人間に人間の精神鑑定ができるのかと、疑問を感じるのですが、死刑を宣告された本人に、その時の拘置所長が、この鑑定書の言葉をみせて、この点に関して君はどう思うかとたずねました。その拘置所長が大阪矯正管区長となられて、第十九回近畿教誨師大会でこのことを話されました。本人の答えは静かに深いものであったといえます。

「吉益先生のお言葉、これは私のやつた犯罪から見れば当然のことと、それどころか、もつとひどい言葉でムチうたれるのが当然だと思います。ただ、おかげさまで、私はもうくさされても、ほめられても、それで大きく心が揺れるという境地だけはこえることができました」

深い感動が私をとらえました。死を前にして何と崇高な精神に到達したことか。キリストの教えが深く、ここまで浸透したことと、尊さに頭下がるばかりです。それにひきかえ、何とまあ私の毎日は散乱放逸の連続であることか。凡夫と仏によばれたこの人間の心の動きは、最期臨終まで、とどまらず、きえずといった状態から寸刻もはなれることができません。ほめられても、くさされても大きく心が動揺することがあつてはならない、それが金剛堅固の信心なのだと教えられたならば、いかがせんという歎きをくり返すより外ないばかりになつてしまします。

ふと、曉鳥先生のお歌が目にとまりました。

ほめられてうれしうのぼり　けなされて悲しうしずむ　めでたきわれよ

なんとかなりたいと力んでいたものが、なんともならないままでよかったのだと、この歌が教えてくれます。何によつても心が動揺することのない堅固な心をもてと、聖人はいわれたのではなかったのです。「仏かねてしろしめして煩惱具足と仰せられた」という言葉にあいながら、少しも遇つていなかったのです。既に見ぬかれ、見透され、知り尽されていた私であつたという本願の前に、何をきばることがいりましようか。両手はなしたままで、煩惱一ぱいを生きたらよかったのです。

「めでたきわれよ」と、自分を見つめる眼、この眼こそ覚めた心、如来の心です。覚めた心がゆるがぬのです。如来よりたまわつた信心が金剛堅固であつたのです。都合のよい悪しに拘らず、心はどれ程動揺しても、願生浄土の願いの原点に帰らしめられるのです。真実の人間になりたいという願いに引き戻されていく、願い一つが不退転であつたのです。

「いかがせん」という心境を通してこそ、「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし」と、結ばれずにおれなかつた聖人のお心そのままが、いまの私の人生に大きな灯炬であつたと、しみじみ味わつたことでありました。

二、いま一人の私

深海魚ひかりにとおくすむものは

ついに目をうしなうとあり

(堀口大学作)

深い海の底にすむ魚は、太陽の光より遠く離れていますので、ついに目が見えなくなることです。秋芳洞にすむ魚も、目がないということを聞いたことがあります。勿論、目はあるでしょうが、見えないのですから、ないのと同じことです。生まれたての乳児は、きれいな目をしていますが、ものは見えませんし、音も聞こえません。それが三、四ヶ月して見えるようになり、聞こえるようになるのは、光があるからであり、音があるからです。だから目をつくるのは光であり、耳をつくるものは音であるといえましょう。

私たちが目を持ち、耳をもつて生まれ、さまざまなものを見、聞けるということは、まことに幸せなことではありますが、真実の光明にあうということがないと、真実のはたらしを見ることも、感ずることもできなくなります。だからこの目はあつても無眼人、この耳はあつても無耳人となつてしまいます。

世界の奇跡の人といわれたヘレン・ケラーは、生後十ヶ月にして熱病のため、三重苦という重度の障害をかかえた不幸な少女になつてしまいました。病院も見はなしたこの少女を、だれかすくつてくれるものはないかという、父の涙の訴えにアン・サリバンという女性が家庭教師として赴任しました。彼女の献身的な努力が身をみすびました。盲啞教育専門のパーキンス学院で、彼女の教育法をみようとする千余の人が集まりました。この不幸な少女は果して何をしゃべるのか。好奇の目の前で壇上のヘレン・ケラーは左手で詩の本をまさぐりながら、右手を高く上げ、その文字を空中に書いてゆきました。同時にサリバン女史は、空中にあらわれては消えていく文字を、すばやい早さでよみはじめました。深い感動と、驚きのどよめきがおこり、この朗読は大成をおさめました。

ヘレン・ケラーは、その後の血のにじむ努力の末、口で話す技術をおぼえ、ハーバード大学を優秀な成績で卒業し、著作もし、社会事業家として世界を講演してまわり、かくして三重苦を克服したのです。彼女はこういつています。

「私にとって大事なのは私以外の教師ではない。いま一人の私が必要なのだ。それはサリバン先生である」と。

私以外の教師は外から、ああせよ、こうせよというが、三重苦の私にはどうしてみようありません。「いま一人の私とは、わたし自身にまでなつてくれる人、私の目となり、耳となり、口となつてくれる人でなければならぬのです」

凡夫とは感染のものと正信偈にあります。煩惱にそまつてしまつて存在です。なにがそろわなくても、煩惱だけはそろつて充分なのです。一つのことを完成しようとするのは、大変な努力が必要です。僧鉄眼は一切経の版本を完成するのに十七年かかりました。だが、私たちにとつて煩惱だけは努力なしに、すでに完成し、成就しているのです。煩惱成就、煩惱具足、煩惱熾盛の凡夫人の見ることに聞くことすべては、煩惱によつていろづけられています。煩惱とは「使」・「縛」・「結」などともいわれ、「蓋」とも「覆」ともいわれますが、煩惱によつて私は使われ、縛られ、結びつけられ、真実を感じるはたらしを覆い、蓋をしてしまうのです。煩惱の目でとらえたものをまことと思い、煩惱の耳で聞いたことを正しいと信じてしまいます。ヘレン・ケラーは「いま一人の私」といいましたが、つまり、煩惱成就凡夫人の目となり、耳となつてくれるもの、「いま一人の私」とまでなつて下された如来、それこそ信心のはたらきのほかにありません。信心は智慧としてはたります。この智慧は如来の智慧ですから、煩惱はどれ程はたらいでも、それによつて影響をうけることはないのです。見えてくる真実を、覆い蓋をすることはありません。毒蛇とまでいわれた煩惱に縛られることも、かまれることもないのです。

『阿弥陀経』に「かの仏の光明、無量にして、十方の国を照らすに、障碍するところなし。このゆえに号して阿弥陀とす」(p128)と、あります。ここからして阿弥陀の光明は、無量光、無辺光、無礙光の徳をもつています。いまこの三つ

の光明を『浄土和讃』にてらしめすと、無量光には「光暁かむらぬものはなし」、無辺光は「光触かむるものはみな」、無礙光には「光沢かむらぬものぞなき」とあります。

阿弥陀の光明を「光暁・光触・光沢」の言葉をもって特徴づけられましたが、まず光暁の「暁」には、「あきらか、つげる、さとする」という意味があります。有限有量の人間のすがたをあきらかにし、煩惱具足の身であることをつけ、さとらしめるものが無量光であります。「光触」とは御左訓に「ひかりを身にふるるというところなり」とあります。都合のよしあしに偏執して、有頂天になったり悲観したりして、凡夫が凡夫であることにおちつけない、そのおちつけなくしているものである悪業煩惱を砕いて下さるものが、無辺光であります。「光沢」には「ひかりにあたるゆえにちえいであるなり」と、左訓されています。本願の名号を聞くことによつて生じてくる智慧とは転悪成徳の智慧であります。

無礙光の利益より 成徳広大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ すなわち菩提のみずとなる (p493)

「かならず」とは人間の側からの発言ではありません。それは仏の側からの言葉ですから、絶対に間違いはありません。煩惱のこほりをかならず菩提のみずとせしめる智慧、それは光にあたることから生じてくるものなのです。「こほりとけ」と、氷と表現された煩惱が解けていく、それは又、糸のもつれが一つ一つ解きほぐされていくようなものでもあり、煩惱でいっぱいの人々が、一つ一つ解きほぐされて聞法のための人生であった、仏道の一生であった、本願力に遇うための生涯であったと、なんの抵抗もなしに、心の底から素直にうなずけている境地なのであります。

先年広島で、生まれたわが子が盲目であったというだけの理由で、「この子が成長しても、さぞつらい思いをするだろう、そんなことならいつそ、何もわからないまのうちに」と、わが子を窒息死させた若い母がありました。わが子がつらい思いをするのではなくて、実は自分がつらいのです。母の煩惱のために尊いいのちが一つ犠牲にされました。盲目の子をかかえて若い母の人生は、たしかにきびしいものであります。しかし「この子のおかげで」と、「おかげ」に育てられる目が、この母親にはなかったのであります。

なくなられた塩尻公明先生の書物の中に、親鸞聖人の教えに生きぬかれたお母さんを観察して、先生は書いておられます。「母の手紙の中に最もひんぱんにあらわれている考え方は、起こりきった一切の事件を、すべて意味あるものとして肯定しようとする事、及び起きたらんとする一切の事件と、一切の苦痛、悲哀、不幸とを、凡て真正面から受けとろうとすることの二つである。凡てがよかったという感触と、凡てを受けとろうとする心構えとは、密接に結びついているようである」と。

そのように凡ての出来事は涅槃にむかわせずにはおかまいという、本願力のあらわれであったとうなずけるととき、すべてがよかった、すべてを受けとる、という智慧は、私にまでなつて下さった如来の、いきいきと働いて下さるすがたであったと受けとることができるであります。

四、光暁かむる

智慧の光明はかりなし

有量の諸相ことごとく

光暁かふらぬものはなし

真実明に帰命せよ

(浄土和讃・p479)

無量光の徳を表した御和讃であります。

「有量の諸相」に「世間にあることは、みなはかりあるによりて有量という」と、御左訓されています。いかなる人も一回かぎりの、繰り返すことができぬ人生を、独りで歩む、そして必ず終わりがくる、それがある日突然にやってくる、まさに有限にして無常なる厳粛な生の実相を生きているのです。「光暁」の御左訓には「光にてらさるるなり」

と、あります。又、「曉」には「あきらか、さとす、つげる」という意味があります。有限無常であることにおちつけない、満足できない、そこで無限に手を出し、完全であろうとする人間に、有量でよかった、有限無常でよかったのだと、有限者としての存在に、異議と場を与え、かわる必要がなかった、私は私でよかったとあきらかに、さとらせ、つげてくれるもの、それこそはかりなき智慧の光明のはたらきであります。

先年、洛東の禪林寺、通称永観堂の「みかえりの御本尊」を拝観しました。何とも童顔としか表現しようのない、あどけない、可愛らしいこの阿弥陀像は顔を真横にむけておられました。つまり見返られたお姿であります。聞けば永観律師（一〇三二—一一一一）は子が親を慕うごとく、この阿弥陀如来にお給仕申し上げ、毎夜、念仏申しつつ堂内を行道するのが、その日課でありました。ある夜、ふと前方に暗い影をみとめました。狐狸のたぐいかと、思わず立ち止まった永観に、その影は顔をふりむけ、「永観おそし」と、声をかけられました。眼をこらせば、朝夕お仕えしている阿弥陀如来であります。あまりの勿体なさに、おそれおののき「そのままのおすがたにて、衆生済度の実をお結び下さるよう」と、お願い申しましたところ、お顔は見返られたままのお姿になられたということです。随筆家の岡部伊都子さんは、この「みかえりの御本尊」は、陽の目をみることも出来ず、うづくまつている人、常に人の前に出ることも出来ずおくて歩む人、ついそのため、ひがみの心をおこして自信をうしなっている人にまで、お顔をめぐらし、いたわりの眼をむけて、共に歩もう、自信をもてと、どこまでも待ちつづけ、信頼していて下さる大悲を象徴したものであると評しています。すばらしい感覚です。

更に言葉を足すならば、得意の絶頂にあつて、ついわが身を忘れて走りすぎている人、人を見くだし自分の地位・権力・富をほこつて高あがりをしている人にまで、危いぞ、怪我するぞ、有頂天になるなと、ふりかえつてまで、素直な自分にかえれと声をかけられる姿でもあります。

自分が自分を忘れて、自分以外のものになろうとする、なれる筈はないのに、人間の眼が外に向かっているところから、ついあこがれるのです。「あこがれる」は「あくがれる」から転じた言葉で、「あく」とは居り場所、「がれる」は離れるということを意味します。だから「あこがれる」とは、自分の居り場所を離れる、幸福をあこがれるとは、自分の居り場所に満足できないで、青い鳥をさがすように外へ外へと追いかけていくことなのです。しかし、どれ程、外へ求めても満足もなければ安心ありません。実は、その自分の居り場所にこそ、阿弥陀の願いの光がかけられてあつたのです。

花に酔う胡蝶は胡蝶蓑虫は簑着たるまま春の光に

という歌を見たことがあります。胡蝶は美しい羽根を広げて、花に酔うごとくとび交うまま、蓑虫は簑着た見苦しい姿のまま、その身一ぱいに春の光を蒙っているのです。胡蝶は胡蝶のままでよいのであり、蓑虫は蓑虫のままでよいのです。エビはエビのままでよいのであり、カニはカニのままでよいのですが、戦後ザリガニ（私の方ではエビガニという）というのが出ました。おそらくエビがカニにあこがれてなつた姿でありましょう。

数年前、癌でなくなった勝次郎さんのことを想い出しました。

その頃でたストマイで耳がおかされ、それまではその寺の総代や世話方などをしていましたが、耳がきこえなくなつて、寺役をすべてやめ、聞法一途の晩年をおくりました。いつも演台の前に座り、首をかしげ、耳に手をそえ、一言も聞きもらすまいと努力していました。毎年の父の命日にお取り越しをとめ、多くの人びとに案内し、自ら甘酒をつくり、お供養の品々を配つてもてなしました。その時も私の目の前に坐つて、きき耳をたてていました。

ある時、私は聞きました。

「勝っちゃん、よく聞こえるのですか」

「聞こえる時と、聞こえぬ時があります。天気の良い日は割合によく聞こえますが、曇りの日、雨の日などはさっぱりです。又、声が大きいからよく聞こえるともいえず、声が低いから聞こえぬということもないのです。不思議な耳です」

「今日はどうでした」

「天気のせいかな、聞こえたり聞こえなかったりです」

「それでは法話のすじがわかりませんね」

という、私の愚問に、

「そりやわかりません。ちぎれちぎれに聞こえてきて、ちぎれちぎれにお念仏させていただいているだけです。でもね、聞こえぬときは、話される方の口もとを見ていますよ。その口から尊い仏法が流れ出て下さるのかと思いますと、目からも仏法が入って下さいます。話はわかりませんが、仏法はわからしていただけるようになりました。なかに、よく聞こえていた時でも、こと仏法のことになると、心はあちらにとび、こちらにとびで少しもおちついていませんから、ちぎれちぎれと同じことです」

「それでも、昔のように、もう一度聞こえるようになれたらなあ、と思わぬことはありませんか」

「いや、そんなことは思いません。もし、よく聞こえていたら一生寺役ばかりして、人さまの世話ばかりでおわつてしまうことでしょう。聞こえなくなつたおかげで、我が身の世話をさせていただくことになりました。このままでよいのです。これでよいのです。有難いことです」

少しもかげのない明るい顔で答えてくれました。

私は私以外のものになれるものでもなく、又なる必要もなかったのです。私の人生の歩みそのものがかけがえのない尊い一生であつたのです。あれがなければ、これがなければと愚痴をいうこともなく、あなれたら、こうなれたらと思ひ感うこともないのです。すべては今日の私を生み出してくれた仏縁であつたのです。どれ一つ欠けても、今日の私はなかったであります。私の一生にお礼さえいえにくるのです。

しかし、人間の迷いの業の深さから、時にはなれぬことをのぞんでみたり、なれぬことに悲嘆してみたりすることもあるでしょう。本願に目覚め、うなづいた心を信心とあらわされました。それは「歓喜地」ともいわれています。単なる歓喜ではなく、「地」といわれた一言に千鈞の重みを感じます。私たちはいかなることがあつても、大地から離れることが出来ぬように、どれ程、自分の居り場所を失つた生き方をしていても、いつでも素直な自分、私は私でよかつたという、きばることもいらぬ、力むこともいらぬ、両手はなしたままの広大な世界に帰らしめられるのであります。

五、十余ヶ国の境をこえて

私の人生

「おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり」(p626) という言葉から、『歎異抄』第二章がはじまっています。おもうに関東常陸の国より、京に帰られた聖人をたずねて、四、五人乃至十二、三人の人びとが、いのちがけでたずねてきたその本心は、ただ一つ、往生極樂の道を問いきかんがためでありました。往生極樂の道とは、言葉をかえれば人間成就の道ということでありましょう。

常陸を出発して、下総、武蔵、相模、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江、山城の十余ヶ国をこえていくのですが、それぞれの国にはそれぞれの特徴があります。人情のこまやかな国もあれば、薄情な国もある、暖かい土地もあれば、寒い地方もあります。風土、習慣、言語、なに一つとして同じものはありません。その未知の国を歩むのですから、その道中どんなことに会おうかもしれせん。どれ程か緊張もし、不安も感じたことでありましょう。

そのような求道の先達のすがたを偲びつつ、ふと「十余ヶ国の境をこえて」とは、私の人生でなかったかと、思いつかせて頂きました。苦難、困難、災難さまさまな体験を通して、人間が人間に成っていくのではなかったのか。つらいこと、悲しいこと、嫌なこと、そこを通らぬことには人間が成就しないのではなかったかと、思ったことでありました。

通らねばならない道

一年の四季にしても、春はよいが夏は嫌、秋はよいが冬は嫌と、いくらいつてもどうにもならないのです。夏は暑さをのがれられないし、冬の寒さにもにげることはできません。夏は汗をながして暑さにうだればよいし、冬は寒さに

ふるえて身体を固くしたらよいのです。それを今は冷暖房の中に逃げるようになりました。
放し飼いにされている猿の国の見学心得にこう書いてありました。

- 一、にらんではいけません。
- 一、にげてはいけません。
- 一、さわつてはいけません。
- 一、こわがつてはいけません。
- 一、さわいではいけません。

猿に怪我をさせられる人が多いので、つい書かれたものでしたが、私も人生におくるさまざまな出来ごとを、にらんではなりません。取り乱してさわいでもならないし、にげてなりません。といつてこわがることもいりません。「災難にあう時節にはあうがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」といった良寛さんの言葉をかみしめれば、いかなる現実も素直にうけとつていくことが教えられるようであります。

むかし、剣術修業のため入門した武芸者も、決して最初から竹刀はもたされず毎日拭きそうじ、まき割り、水くみの日課でありました。それが何年間もつづいて脱落する人も多かったようですが、その無駄と思えることが、身体をきたえ心の坐りをつくるためにも、欠かすことができない訓練であつたのです。矢張りそこを通らねばならないのです。

人間成就とは

明治のはじめ、税所敦子という歌人がありました。京の仏法者の家に生まれ、幼い頃より歌の道に入り、のち縁あつて同門の税所篤之の後妻となりました。一女を得ましたが、夫は亡くなりました。鹿兒島に在住している老母をたのむと遺言されたので、念仏禁制であつたその土地に赴く決心をしました。同門の人は念仏者であるあなたには迫害にあいに行くようなものであると引きとめました。敢えて幼女の手をひき鹿兒島に下りました。二人の先妻の子と、老母の待つてゐる実家は、この人にとつて針のむしろであつたと伝えられます。人情、風俗の異なる南国の果てで、都そだちのこの女性、どれ程か心細く淋しさを感じたことでありましょう。連日の苦勞も又、並大抵のものでなかつたようです。あまりにも姑の嫁いびりのひどさに、遂にその地の人々もたまりかね、税所の鬼婆とののしるようになりました。

わたしのことを鬼婆といわせてゐるのは、おそらくあの嫁であろうと、いきり立つ心をおさえて嫁をよびつけました。

「わたし、いま歌の下の句をつくりました。これに上の句をつけて下さいな」

と、わたされた下の句。「鬼婆なりと、人のいうらん」

鬼婆といわれるのには、いわれるだけの原因があります。しかし、それを指摘することはゆるされません。お待ち下さい、とさし出した上の句。

「仏にもまさる心と知らずして」

と、ありました。「仏にもまさる心と知らずして、鬼婆なりと人のいうらん」

じつと見つめる老母の我執は、この時はじめて崩れ砕かれたのでありました。

彼女はさまざまな苦難を人間成就の道と受けとり、勤めはげんだのであります。

朝夕のつらきつとめはみ仏の

人となれよのめぐみなりけり

つらいつとめをめぐみとうけとつて、人間成就の道を歩んだのであります。

人間成就とは偉い人になることでもなく、人格者になるのでもなく、仏法者、後世者らしくなるのでもありません。

自信を深信するめざめた人になることです。それは如来の教法にあつてのみ自覚せしめられるのです。一つ一つの出来ごとがすべて自分を明らかにする材料であり、十余ヶ国の境をこえていくことが御縁となつていくのでありました。

光をあおいで

經典に「大海の水の深さは知れても、わが心の深さは知れない」とありますが、親鸞聖人ほど、自分を凝視しつづけられた方はありません。八十五歳になつても「浄土真宗に帰すれども、真実の心はさらになし」(p508)と和讃し、「無慚無愧のこの身にてまことの心はなけれども」(p509)と、悲歎述懐なされました。わが心に蛇蝎をみられて、慄然となされたのです。しかし、この地獄一定の悲しみにおたちになつたからこそ、如来の本願に遇いた慶びも、又一しおであつたのです。南無のところに既に阿弥陀仏がおられたのです。光なきもののみが、光を仰ぐことができるのです。

『阿弥陀經』の中に「これより西方に、十万億の仏土を過ぎて、世界あり、名づけて極楽と曰う」(p126)と、あります。十万億の仏土とは私の一生であり、人間成就ということに目覚めたものには、十余ヶ国の境をこえていくことがすべて、仏土であつたとうけとつていけるのでありました。

六、請うなかれ求むるなかれ

靖国神社法案を契機として、いわゆる神の問題を考えてみなければならぬようになったようです。神とはいつても、私たち日常生活では普通、神・仏として、厳密に区別しないで受けとり「生きている間は神さんに、死んだら仏さんに」ということぐらいの漠然とした概念で接しています。しかし、親鸞聖人は神を天神地祇としておさえられています。

天神とは日、月、星辰、四季の運行など“不思議なもの”としてあがめ、おそれてきました。地祇とは社会をつくるについて山河、海陸などの地勢のめぐみ、それらは山の神、川の神、木の神となり、人びとの幸福と繁栄のために骨を土にした先覚者、産業につくした人とか、戦いに勝つて国をまもつた人とか、正しい政治をした人などを神としてまつたのが地祇です。

これらをまつり崇めることによつて、貧しい生活を精神的に豊かにし、人の心の糧としてきたのであります。それがいつか、人間の我欲によつて利用され、除災招福の手段となり、ついに迷信化してしまつたのです。仏という場合も、先祖そのものであり、それをまつることは、その霊をなぐさめ、あわせて先祖に守護してもらうための意味にか受けとられています。つまり神仏に祈念することによつて、自己および家族一同が、難にあわず世俗の幸福感にひたつて、楽々と一生をおくれるようにという交換条件から、神社にまいり、神棚をまつり、仏壇をおいたのであります。

一人息子を戦死させ、家は戦災にあい、そのうえ主人と死別という悪条件の中から仏法に育つていった老婦人がありました。この人が縁あつて再婚したとき、夫になる人に、

「私には仏道をあゆむということしか残されていません。聞法のために家を出ることだけは止めないでください。その他のことには無理はいりません」

これがその条件でした。晩年、癌になつて苦しんでいましたが、聴聞だけは欠かしませんでした。

あるとき、注射、やいとのとあと、シミ、ホクロの醜く浮き出た骨と皮ばかりの手と足を見せて、私に言ったことがあります。

「私はこの手と足を撫でながら拝んでいます。こんなやせた身体であつても、この身があればこそ仏法にあえたのです。私はこのやせた身体にお礼を言っています」

またあるとき、その主人が神棚をこわしているのを見て、

「なぜ、神棚をこわしているのですか」

「お前といつしよに仏法を聞くようになってから、なんだか、神棚はなくてもさしつかえがないように思うように

なったのだよ」

その婦人は、そう私に話してくれました。

「それでは、あなたはなぜ仏壇をまつりおまいりしているのですか」と聞きました。

「聖人の教えにあつて、もうたのむことがいらなくなりました。ああなりたい、こうなりたいとあくせくしていた心が、どうなつてもよかつたと落ちつかせてもらえようになりましたので、そんな心にまでお育ていただいた仏法にお礼を言っているのです」

見事な独立者、清沢満之先生の「請うなかれ、求むるなかれ、汝何の不足かある」の具現者といつてよいでありましょう。

モンテニユは、「虫けら一びきだつてつくり出せないくせに、神々だけは何ダースでもこねあげる」と言っていますが、いつか煩惱によつて神さまをつくり出し、その神さまの性格まで変えてしまっているありさまです。いのり拌むのは、それに相当するご利益を期待し、いや、それは神信心することにより、心が落ちつき、すがすがしくなり、感謝の心で生活できるからだといいますが、それもそういう心を交換条件として求めているのです。人間の欲望をみたすために神仏まで利用する。その心がますます人間の心を寒々としたむなしものにしていく、それにさえ気づかないで、あせり狂っているすがた、それを和讃に「三塗にしづむ」と表されました。三塗とは三悪趣（地獄・餓鬼・畜生）のことですが、ふと“塗”ということを考えてみました。

“塗”とは泥の意味であるとされています。また、塗炭の苦しみということばもあります。泥にまみれ、火に焼かれる状態をいったものですが、豪雨による土砂くずれによつて家屋が倒壊する。土砂の中に生き埋めになつて苦悶の形相で亡くなられる人びとが毎年でています。あるいは、高層ビルの火災によつて、新建材よりおこる猛毒ガスによつて窒息状態になり、にげようとしてもにげられない、無残にも焼けたセメントにひつかいた爪のあとがあつたというニュースに胸が痛みます。

息がしたい、息のできる場所にのがれたいと苦しみもがいている、無間地獄は阿鼻地獄ともいわれますが、阿鼻とは鼻がない、息のできない状態、これほどむごいことはないでしょう。しかし、その道がわからない。神仏を利用してまで、自己の煩惱を満足させたいと、息づまるようなあがきをくり返している、そして、ますますそれに気づかず、迷いを深めていくすがたに、道すでにあり、自己の根元のいのちの願いにかえれと示されたのでありました。

蓮如上人は、

「それ、一切の神も仏ともうすも、いまこのうるところの他力の信心ひとつをとらしめんがための方便に、もろもろの神、もろもろのほとけとあらわれたまう」(p789)

と言われ、また、

「信もなき衆生の、むなしく地獄におちんことを、かなしみおぼしめして、これをなにとしてもすくわんがために、かりに神とあらわれて、いさやかなる縁をもつて、それをたよりとして、ついに仏法にすすめいれしめんための方便に、神とあらわれたまうなり」(p780)

と、とりわけ神をあがめなくても、ただ弥陀一仏をたのむうちにこもっている、明示しておられます。

長い間の日本人の心情の底に習俗化してきた神仏に対する考えというものは、一朝にしてとり除けるものではありません。いわば生活の一部にまでなっている、その心を、弥陀たのむ〓本願をたのむ〓ことによつて、迷信盲信化した心が明らかに知らされてくるのです。つまり、神とは、私の弱い心、すぎる心、たのむ心を知らしめ、独り立ちをして光に向かつて歩めということを知らしめてくれるための神、私の浅い心を知らさんがために、かりに神とあらわれたのであります。

金子先生が『大智度論』の一節を引いておられます。ある長老が若い比丘をつれて歩いていました。比丘は羅漢である長老の荷物をかついで、後についていました。比丘は、私はこうして荷を背負つて歩いているが、この長老のように生涯、羅漢で果ててはならない、仏になるための菩薩道をあゆまねばならぬと、ふと思いました。長老は足をとめ、「荷物を私にかせ、そしてお前は私の前を歩け」

若い比丘は長老の心をはかりかねましたが、その通りにしました。比丘はまた、考えました。菩薩道をあゆむということは、なみたいていのことではあるまい。この偉い長老ですら羅漢どまりではないか、わたしも羅漢ぐらいで満足しておこう。すると、長老は、

「待て、お前は私の荷物をもって私の後からついてこい」

長老はさつきと前を歩きはじめました。二、三度そういうことが重なりましたので、長老は年もとられ、気ままになられたなと思いました。そこで思いきってたずねました。

「どういうわけでありましょうか。私の荷物をもって後からついてこられたときがありました。また、しばらくして私に荷物をもたせて、先をあるかれました」

「わたしが荷物を背負って、お前を先にあるかせたときは、お前が大菩提心をおこして仏になろうという大願をおこしている。そういう人物には、私は長老であると、いばっておられぬ。そこでお前の荷物をもって、後からついていこうとしたのである。ところが、その菩提心がくずれて弱い心をおこし、羅漢で満足しておこうという心をおこした。羅漢でよいというのなら、私はすでにお前より先になっっているから、お前は私の荷物をもって、後からついてこいといったのである」

と、こたえました。若い比丘は深く感動して大菩提心をおこしたとあります。

大菩提心をおこして仏道をあゆむものは天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することができないのです。本願にめざめた心には、いかなるものもたのむこともいらず、なにひとつおそれることもないのです。たのめばたのんだものにしばられる。しばられることによって、自由をうしない、果てはその顔色までうかがわねばなくなつて、その心は常に、不安と動揺、そして焦燥をくりかえしていくことになるのです。

天神地祇はことごとく

善鬼神となづけたり

これらの善神みなともに

念仏のひとをまもるなり

(p488)

と、和讃されていますが、自己の煩惱のつごうのよいようにまもられるではありません。あくまでも本願にめざめた真実信心を守護されるのであります。

すでに明らかにされている神の問題、そして仏のことも、あらためて、いま一度、お聖教に照らしてたしかめなおす必要があるのではないかと思われまふ。

『いのちの底に』 松井恵光

安泉寺刊・1978（昭和53）年1月28日発行

配布元：真宗大谷派大阪教区「銀杏通信」

<http://www.icho.gr.jp/>

営利目的での転載・再配布を禁ずる。